そうじの力だより

VOL.224

支援レポート

捨てれば新たな価値が生まれる
～見方を変えて、より良い形をイメージしてみる～

群馬県藤岡市の㈱石井工機。社員四〇人の工作機械メーカーです。

昨年はじめから取り組んだ環境整備の活動が、ちょうど満一年を迎え、先ごろ、全社員を集めて、振り返りの会を開きました。

私の方から、取り組み前のいわゆるビフォア写真と見比べてもらいました。皆さん、「以前はあんな状態だったんだ」というふうに、苦笑いしていました。

取り組み前は、とにかくモノが多く、各所ともに手狭な状態でした。

工作機械は、すべて受注生産で、図面に応じて材料を仕入れるところから仕事がはじまります。ところが、仕入れた材料が余ってしまったり、手違いで使われなかったりしたときに、それを何かに使えるかもしれないということで、取っておくのですが、それが積もり積もって、溢れかえっていました。

機械設備や工具、治具も、以前からあったものが、そのまま残っています。

まずはこの一年間は、それらの中で使っていないものを捨てて、実際に使っているものだけにする「整理」を徹底的に行いました。

いったん全部出して、不要物を仕分ける

各部署とも、大量にモノを捨てました。

最初は誰しも、「もったいない」という気持ちがあったと思いますが、実際に余計なものがなくなってみると、その効果を実感してくれているようです。

溢れていた資材をほぼ全部捨てて

違う用途のスペースにすることができた

社員さんたちに、感想を述べてもらいました。

〈捜し物が減った。作業の動線も短くなり、仕事がしやすくなった。〉

〈余計なものがなくなり、スペースが拡がって動きやすくなった。〉

〈仕事場がスッキリしているので、気分がいい。〉

〈以前から気になっていた床に直置きしていた書類を棚に収めることができて、良かった。〉

私はよく言うのですが、モノよりも大切なものは時間です。時間とは、つまり労力ということ。このことを、皆さんが実感してくれているようです。

面白かったのは、以前は工場の壁の桟に、端材や油脂類を置いていて、それが当たり前になっていたのですが、それをやめて、桟には一切ものを載せなくなりました。

それを見た社長から、工場内は寒いので、壁に断熱材を入れて壁板を貼り直してはどうか？という提案があり、現場の人たちはそれがとても嬉しかった、ということです。

以前は壁の桟に色々なモノを載せていた

壁の中に断熱材を入れて暖かくする予定

また、現在、工場建屋の統廃合と新工場の建設を行っています。その流れの中で、シャーリングマシン（せん断機）を別エリアに移設する予定だったのですが、あらためて考えてみると、そもそもこのシャーリングマシンの稼働の頻度が低く、必要以上にサイズが大きく、場合によっては外注もできることなどから、この機械は廃棄し、必要ならば小ぶりなシャーリングマシンを調達することを検討することになりました。

こんなふうに、環境整備の活動を通じて、これまで常識だと思っていたことについて、従来の延長線上で考えるのではなく、「そもそもどうなの？」「根本解決のためにはどうすればいいの？」という問いかけをする空気ができてきました。

石井安美社長は、「この一年で、外注加工費が激減し、粗利益率が大幅にアップした。余計なモノがなくなったおかげで、無駄がなくなり、動きが良くなったことで、単位時間あたりの生産性が上がり、外注に出す必要がなくなり、自分たちで仕事をこなすことができたのが要因と思われる。」とコメントしています。

ようやく、整理つまり「捨てる」段階が完了に近づいてきました。今後は、整頓つまり「分かりやすく配置する」フェーズ、そして、清掃つまり「掃いたり拭いたり磨いたりする」フェーズに入っていきます。

（小早）

企業・団体の研修や講演を承ります。目的や対象者に応じて、時間や内容をカスタマイズできます。まずはホームページをご覧ください。

コラム

人出不足解決のカギは、「オンリーワン」にあり
～燕三条オープンファクトリー見学ツアーより～

ここ数年、毎年、新潟県の燕三条オープンファクトリーを見学しています。

オープンファクトリーとは、当地の地場産業である金属加工業を中心に、工場見学を積極的に受け入れることで、観光の促進や社員のモチベーションアップを図る、地域おこしの取り組みです。

今回のツアーで衝撃を受けたのは、銅器の老舗「玉川堂（ぎょくせんどう）」を見学したときです。

創業二〇〇年超。現在の工場建屋も、一〇〇年を超える歴史を感じさせる古民家のような建物です。

ここに、十数人の職人さんたちが集い、すべて手作業で銅器を制作しています。

銅の薄い板材を槌を使って叩きながら、曲げ、伸ばしていき、複雑な形に仕上げていきます。

制作されるのは、急須や湯飲み、ビアマグやぐい飲み、ソーサーなど。その立体的な形状は、とても一枚の板材から作り上げたとは思えないほど、芸術的な職人芸です。

熱することで銅を柔らかく加工しやすくする

驚いたのは、その職人さんたちの年齢がみな若いこと。平均年齢は、三十代半ばだそうです。

彼らのほとんどは、美大を出た、いわば芸術界のエリート。全国から集まるのだそうです。

同社では、毎年一人を職人として採用するのだそうですが、それに対して、毎年五〇人以上が応募してくるのだとか。

詳しく聞いたわけではありませんが、決して給料が著しく高いとかいうことではなさそうです。

同様に、燕三条の他の会社でも、全国から若い人たちが集まる、という話を伺いました。

しかし一方で、修行は厳しいもののはずです。一人前になるまでに、何年もかかることでしょう。

ここからわかるのは、人材を惹きつけるのは、決して給料や福利厚生といった「待遇」のみではない、ということです。

玉川堂の職人さんたちを見ていると、自分だけのオンリーワンの仕事ができるという「誇り」が、彼らをこの仕事に惹きつけているのだと思われます。

誰にでもできる仕事は、AIに取って代わられる時代が、すぐそこに来ています。「人間としての誇りとは何か」を、あらためて考えてみたいものです。（小早）

古民家風の工場に集う若い職人さんたち

X（旧ツイッター）で、『環境整備 一日一言』を毎日更新しています。ぜひフォローしてみてください！

編集後記

恥部があるからこそ･･･

毎年1月下旬に、草津温泉で経営者仲間と「合宿」を行っています。

色々なツテで知り合った人たちで、業種も地域も年齢も様々。各人がそれぞれの経営計画を練り、発表して、互いに批評し合います。

そして夜は、ハチャメチャの大宴会。ここで交わされる会話は、とても家族や社員には聞かせられない、まさに「赤裸々」な話。

でも、そんな恥部があるからこそ、人間は愛しいのではないしょうか。（小早）

飛鳥のつぶやき

新聞チャレンジ

普段インターネットでニュースを見ることが多く、情報が偏りがちと思い、試しに新聞を購読してみることにしました。

初日は頑張って全面に目を通したのですが、朝晩忙しすぎて、みるみるうちに朝刊・夕刊と溜まっていく新聞紙…。

活字が全然頭に入らず、積まれる新聞紙がストレスで、結局3日目でギブアップ(^q^)。

面白い記事も沢山あったので、いつかリベンジしたいな…！（大槻）

株式会社そうじの力

そうじで組織と人を磨く、
日本で唯一の研修会社

弊社は“そうじ＝環境整備”を通じた「企業風土改革」を支援します。

講義、実習、チームミーティング、計画作り、現場巡回を通じて、社長と社員の意識改革を図り、健全な企業風土作りをお手伝いします。

支援期間は1年から。毎月1回訪問を原則としますが、状況とご要望に応じて、プログラムをオーダーメイドします。また各種団体向けの講演のご依頼も受け付けております。（全国対応）

そうじの力だより第224号　2024(令和6)年3月1日発行　発行者：小早 祥一郎（株式会社そうじの力 代表取締役）
〒370-0078 群馬県高崎市上小鳥町307-1 TEL:050-3709-2333 FAX：050-6868-2721 メール：info@soujinochikara.com

このニュースレターは、転送、引用、大歓迎です！その際には、出典を明記していただけるとありがたいです。